

■ありがとう、そういうあなたに、ありがとう

修正： 2016.01.01

投稿： 2016.01.01



●ありがとう、そういうあなたに、ありがとう①

この世界のありとあらゆる物体には、「慣性」が働いています。

そしてこれは、人の心にも働いていると考えることができます。

「慣性」とは、文字通り、「慣れる性質」のことです。

「当たり前を感じる」というのも心の「慣性」の表れの一つです。

物事は「慣れていない状態」から始まります。

不慣れである当初は、それだけ得られる刺激も大きいですから、
より多くの快感を味わうことができます。

しかし、同じようなことばかりしていると、

徐々に慣れてしまい、やがて何も感じなくなります。

道端で困っているとき、

通りすがりの知らない人に助けられれば、

さぞかし感動することでしょう。

一方、それが家族の人であればどうでしょうか。

いくら困っていたとしても、助けてくれる人が家族の人なら、

そこまで感動しないのではないのでしょうか？

家族の人は、「慣れている人」だからです。

家族なのだから、助けてくれるのは「当たり前」

「当たり前」だから感謝しないのが「当たり前」

いつもいつも、困ったときは助けてくれるわけですから、

自然と、家族の人から助けもらうことには「慣れてしまう」ものです。

本来なら、慣れるほど助けてくれているのだから、

それだけますます感謝しなければならないところですが、

実際はその逆で、だんだん「当たり前」になっていきます。

助けてあげれば「それは当たり前だ」と思われる、

そんな人を誰が率先して助けるのでしょうか。

「慣れのまま」に生きていれば、失うものもでてくるわけであり、
ゆえに「当たり前」は、特に注意して対処していきたい感覚です。

(続)

//=====//

●ありがとう、そういうあなたに、ありがとう②

「当たり前」について、
友人関係を例に取り上げてまいります。

初対面の人同士、出会った当初は、
相手に嫌われないように、言葉遣いも慎重になり、
関係を築くことに、いつも以上に気を遣っていたはずです。

やがて、意識しなくても自然に話せるようになり、
一緒にいることを「当たり前」に感じるようになります。
それが徐々に「**～してくれて当たり前**」の感覚になりがちです。

最初こそ、「～してくれてありがとう」と感謝していたものが、徐々に、
俺もこの前してやったんだから「～してくれるのは当たり前」となり、
手でするものを足でし、足でしていたことをあごでし、
やがてやらなくなっていくます。

少額でお金を貸せば、最初こそ、
「**ありがとうありがとう、やっぱりもつべきものは友達だよな!**」
と感謝しますが、再びお金を借りるときには、

「こいつは人に金を貸す人だから」と、
お金を貸してくれて**当たり前**の感覚になります。

「ありがとう、また来週返すよ」と感謝くらいはしていたものが、
そのうち、「困ったときは、あいつに頼ればいいや」と、
もはや「無利子で、お手頃な金融機関」の扱いとなります。そんな中、

めったに人にお金を貸さない人が、お金を貸してくれるとなれば、
「おおおー、ありがとうありがとう」と感謝します。一方で、

困ったとき、いつでも当たり前のように金銭的支援をしてくれた人に対しては、
「おう、また今後返す」のそっけない返事とくれば、
「お前、何様のつもりだ！」と腹をたてられても、文句は言えません。

だからこそ戒めとして昔から言われてきました。

「親しき仲にも礼儀あり」です。

(続)

//=====//

●ありがとう、そういうあなたに、ありがとう③

突然の体調不良でダウンしました(。>0<。)
いつ何が起ころか分からないものですね…。

//-----

「当たり前」について、
夫婦仲を例に取り上げてまいります。

初めて相手の存在を意識したときは、
どうにかあの人に近づきたい、できれば話してみたい、

「あわよくば仲良くなりたーい！」と遠目に眺めるもので、

やがて距離が徐々に縮まり、お互い緊張し、
嫌われないように、話す言葉、一言一言を注意し、
慎重に慎重に、人間関係を作ろうと、
神経を尖らせていたのではないのでしょうか？

そのうち慣れて、緊張もしなくなり、自然と話せるようになり、
恋人となり、めでたく結婚し、家族となり、
一緒にいるのが「**当たり前**」となります。

そうして「**～してくれて当たり前**」に任せて、
一気に夫婦仲が冷めていくか、はたまた、

「**～してあげて当たり前**」と、お互いに貢献し、
夫婦仲を一定に保つことができるか、分かれ目となります。

夫婦仲も含め、人間関係とは、
相互の努力によってのみ成り立つものであり、
どちらか一方を固定して「～してくれて当たり前」
では、関係は長続きしません。

「俺が俺がの我（が）を捨てて、お陰お陰の下（げ）を拾え」
という言葉が紹介されており、印象に残りました。
人間関係が続けば続くほど、意識せねばならないと自戒しています。

結婚するにあたって、相手の年収や価値観は大事なのですが、
それよりも、相手の「**相互に支え合う精神**」があるかどうかこそを、
評価していかなければならないのではないですか？

（続）

//=====//

●ありがとう、そういうあなたに、ありがとう④

「あの時、俺も～してやったから、今度は、～してくれて当たり前」

の「当たり前」の感覚では、人間関係も壊れていく、
ということについて、3回にわたって述べてまいりました。

親友、夫婦、いつものお得意さん、常連のお客様と、
関係が深まれば深まるほど「ありがたい」はずなのに、
どうしてか「ありがとう」の感覚は薄まっています。

「そ・お・だ、嬉しいんーだ、いーきるよろ・こ・び♪」

でお馴染のアンパンマンについてはどうでしょうか？

いつもいつも、お腹をすかせた子供たちに
自らの頭部の一部を分け与え「ありがとう！」
と感謝されております。が…、やがて、

「アンパンマンなのだから、自己犠牲の精神で、
他者貢献するのは当たり前」と、周囲もそう感じるようになり、そのうち、
感謝も表面的なものでしかなくなっていくように思います。

一方のバイキンマンは、悪いことをして「当たり前」です。
たまにバイキンマンが悪いことをせず、
「今日のところは許してやる！」と、そのまま立ち去っていくシーンもあり、

「バイキンマンもいいこと(?)をするんだな…」と、
心温まる描写がなされております。が、アンパンマンからすれば、

「はぁ～ふざけんなよ！ てめえーらが腹をすかせたとき、
いったい誰が、パンをくれてやっていると思ってるんだぁ！」
と、内心、怒りの炎がメラメラと燃え上がってくるところでしょう。

人間の心には「慣性（慣れる性質）」がありますから、

どう努力しても、繰り返されることは、
「当たり前」に感じてしまうものです。

（「当たり前」に感じるようになるのは、これからのことを考えて、
より意識しなければならないものほど意識を集中させる、
という心の機能とも解釈できます）

「お陰お陰の下を拾え」というのも、
そうした「慣れる」という心の性質に抗い、
「**ここは慣れてはいけない**」と
自分自身に言い聞かせること（知的努力）だと言えます。

（完）

//=====//

Web サイト：

心を力学する ー原理・原則に基づく生き方を考えるー

著者：

時無 和考(Tokinashi Kazutaka)